

文芸特別企画展

記念講演会 「島崎藤村と木下尚江」

日 時 平成十九年五月四日（金）

午後一時三〇分～三時三〇分まで

主催・会場 茅野市八ヶ岳岳麓文芸館

講師 腰原哲朗さん

山田貞光さん

井出孫六さん

聴講者 一一〇名

凡 例

「島崎藤村 『東方の門』の内外」の原稿は、講師のご厚意で講演会后、一部変更加筆されたものです。
「木下尚江 その思想と実践」、「座標軸 木下尚江と島崎藤村」は編集者がテープを起こし、構成上一部に手を加えました。

文章中、敬称は原則省略しました。



島崎藤村『東方の門』の内と外

はじめに

求められてレジュメにも「東方の門を中心」とした。けれども気が重い。『夜明け前』に続く『東方の門』は未完であり、無数にある藤村論のなかでも、この未完作品にかんする論考はすくない。それに当時の社会状況は戦雲をまえに複雑だったから、そうした状況を考慮して『東方の門』に接する必要にせまられる。そこで作品の周辺に言及し外堀をうめながら責をたすコンタンであった。

このたびもその域からでられそうになく気が重い。ケンサクなどという利器とは無縁で、ズクナシのまま引用も確かめずエンピツで記す管見は、すでに発表されている意見と重なる面があるのでは、とおそれつつ蛮勇をふるって記すことをおゆるし願いたい。

ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ

藤村がマルセエユ市のロンシャン美術館でシャヴァンヌの壁画「東方の門」をみて作品名を決めたことは確実である。このことは『島崎藤村事典』に私自身記したことでもあり、拙著『島崎藤村・詩と美術』にも再録してあるので略すが、問題はなぜ藤村がシャヴァンヌに感じ入り、その思いをどのように小説に転化、もしくはブレヒト流に異化しようとしたかにある。

このシャヴァンヌと藤村の関係についての

すぐれた考察は今橋映子『異都憧憬・日本人のパリ』(1)にくわしい。藤村がシャヴァンヌにひかれたのは、画面にただよう宗教性、労働の意味といった側面から、かもしだされるアトモスフィア、ポエジーにあったようだ。宗教性をしめす「眠れるパリを見守る聖ジュヌヴィエーヴ」同じくパンテオンの壁画「聖ジュヌヴィエーヴと聖ジェルマンとの邂逅」といった一連の聖女伝説を再現した静ひつなジャヴァンヌの画面は、藤村の心をうった。当然である。いわゆる新生事件を背負っていたからである。

二点めの労働の意味を示すのはシャヴァンヌの「貧しき漁夫」である。「シャバンヌの絵を見ると、ミレエなどとはまた別の意味で、広い労働の世界のあることを指し示して呉れる」(後の『新片町より』)と藤村はいう。

ちっぽけな舟に立つヒゲの男は、いかにもわびしい孤独な姿だ。藤村の長編詩『農夫』(夏草)「労働雑詠」(『落梅集』)にみられるように、就職にも苦労した藤村は、若いときから労働への関心が高かった。漱石や鷗外とちがいに二足のワラジをはかず、作家という職業に就いた藤村は、職業としての学問と比較しながら(慶應義塾で講じる馬場弧蝶、戸川秋骨などの友人と比較しながら)文筆業をつよく意識した。平野謙『於母影』(2)が、文士から変化していく小説家の流れをみるまでもなく、

ところで藤村の美術への知識は、渡仏時代

腰原哲朗さん

に美学者の沢木梢(四方吉)や正宗得三郎など画家との交流でいつそう高められた。沢木四方吉の名著『西洋美術史論攷』はギリシア美術などが中心であるが、『美術の都』(3)では夜のセーヌを渡りつつ、フランス革命時代の建築について語りながら二人は散策する。

しかし恵まれた学者や画家の留学とちがって、藤村の場合は著作権を手放したりして留学資金をつくつての苦しい巡行だったから、「貧しい漁夫」の絵は身にしみた。鷗外、漱石、荷風の渡欧の歴史が、国家と個人の関係を端的に示すと指摘した山崎正和『鷗外闘う家長』(4)以上に、家長としての藤村にとってこぎだす漁場(作品化)は荒海だった。

そこで藤村は、ひそかにアベラールとエロイズの宗教的な(中世の悲劇的恋物語)をテコに『新生』発表の用意を決意したのではない。ヨーロッパで戦火を実感して帰国し『新生』を新聞に公表したとき、田山花袋は藤村の自殺を本気で心配した。そうした実話(5)にてらしても、藤村の自意識ないし職業意識がいかに強烈だったかがわかる。

このエネルギーにより『新生』での宗教性やポエジーを捨象して『夜明け前』を生むことになった。この『夜明け前』の時点で藤村も国家と個人ナシヨナリズムという近代のテーマを模索することになり、さらに『東方の門』で再考しようとした、というのが私が想定する道ゆきである。

先に私はシャヴァンヌからうけた感興をどのように小説に転化もしくは異化しようとしたか―と強引にモチーフを設定したが、この点について「家の内も外も嵐だ」（『嵐』）という藤村の嘆息の視点からすすめてみたい。

内圧をしのぐ家長

藤村は末子だったけれど実質的には島崎家を支えた家長だった。長兄も次兄（こま子の父）も姉園子の場合も斜陽、経済的に無力であった。安定していたのは、松本市出身の外交官だった田中中文一郎と結婚した、こま子の姉ひさ子くらいである。

馬籠の土地の一部を買いもどして長男を定住させるなど、親族から藤村は常に頼りにされたのである。核家族化の現在とちがって、こうした内情は作家生活に影響する。売文業に堕す危険が生じる。作詞などもせず大衆小説も書かず、俗情を排して簡素をつらぬいた藤村はとにかくエライ。平野謙の有名な『新生論』こま子の父と縁を切るための発表という着眼点を思いうかべるにしても。



さらに内憂は家庭内にも生じた。才気に富む藤村がプロレタリア美術家同盟に参与して盛岡署に拘留される。そのため鶏二がパリに留学した昭和四年、父藤村は勝本清一郎に託して日本から脱出させるのである。そのようすを勝本清一郎『赤色戦線を行く』（6）は次のように記す。「S君が見てきての話によると、駅の待合室には深夜の列車を待つらしい大勢の労働者や農民たちがそれぞれ荷物をかたはらに、ごろごろタタキの上に寝転んで充滿してゐた由」西シベリヤのオムスク駅の風景で、S君はむろん藤村のことである。

こうした藤村の左傾は、志賀直哉父子や高村光太郎父子などの場合とちがって深刻だった。人生観や芸術観の対立以上に政治的だったから、いわば画業留学をメイモクに、運動から無難に距離をおく藤村の配慮で、悲劇的にならなかったといえよう。（通俗的な意味で）このような、時代にホンロウされる父子の葛藤は、たとえば山口知三『ドイツを追われた人びと』（7）に活字されるトーマスマン父子の動向と重ねあわせたい。

それはともかく藤村のスタンス感覚、バランス感覚ともいふべき慎重な姿勢は、時局にからんでどのようなものだったか。たとえば翼賛会文化部より詩歌朗読を求められたとき『千曲川旅情の歌』を同部に寄贈す（『雑記帳』）といったように関係のとりかたは慎重で、たくみだ。

こうした遠慮がちな慎重さは、もってまわった藤村の文体といわれるように多くの感想集にもあらわれている。試みを厚誼とするエッセイ集あるいは随想集とせず、「感想集」とする藤村のコラム的文章は、断定をさけて評論

的色彩から遠い。こうした藤村文体の特色は、他家で遠慮がちに育った人生経験が原因ではないか、と指摘したのは伊藤整だったとおもいますが、そうした自分の性格を藤村自身も認めていたようだ。

馬場弧蝶『明治文壇の人々』（8）には次のような藤村の告白がある。「自分の家庭といふものを知らなかったもので、それが僕の性格に大分影響したと思ふ。たとへば、変に控へ目なところのあるのなども、その一例だらう。」さて藤村は子どもに対しても、円本ブームなどで一息つけた段階で、バランスよく資産を『分配』で描くように配慮する。鶏二は飛行機事故で亡くなるが、新聞（9）が報じたように画業に専念させる。一人娘柳子の佐久平での結婚を見とどけ、内憂を解消しつつ静子夫人同伴で有島生馬とペンクラブ大会で巡礼の旅にでる。

この「巡礼」もひょうとして和辻哲郎『古寺巡礼』を思いうかべてのことか。和辻哲郎との親交は晩年で、親密な交際が続いた。しかし日常生活上のことで、カンジンのマルクス主義については二人とも深入りしなかったようだ。湯浅泰雄『和辻哲郎』（10）からも推測できる。藤村と同様こま子も左翼運動に関係していたのだから、藤村自身無関心のはずはないが、和辻哲郎と同じく、「風土」や移民中心の文化論の立場で、階級闘争、イデオロギ―問題をさけての日常交際だった。もつともこうした姿勢が、滞仏中親しかった河上肇との関係が、藤村帰国後冷えた遠因になったとおもわれる。

時代はとにかく、近代の超克論争をふくめマルキシズムはさけて通れない。そうした渦中

にいた一人勝野金政『藤村文学―人とその風土』(11)は、問題は階級闘争より民俗闘争だとヨーロッパ滞在で実感したと強調している。ところで藤村にとって解消できぬ内憂が一つだけ尾をひいていた。巡礼を終えて『東方の門』にとりかかるころ、こま子『悲劇の自伝』(『婦人公論』)により騒ぎが大きくなったことである。この件で体調をこわし「改造」連載中の『巡礼』を一時中断する。さらに藤村を悩ませたのが、外からの圧力だった。

外圧との調整

外からの嵐は、国家権力、時代の要請で藤村に限ったことではないが、高名な人にとって、それなりに大変だった。藤村が辞退したのが帝国芸術院会員、逆に引きうけたのが大東亜文学者大会でのバンザイであった。

大正期の西園寺公望の雨声会(12)に顔を出し『東方の門(序章)』でいうように南方従軍をことわり、そのため消極的にシグシグといった風情でバンザイの音頭をとる藤村の姿を、平野謙は好意的にみていたとおもう。

さらにバランス感覚をもつてしても、外圧に抗しきれなかったのが「戦陣訓」への関与であった。この辺の状況は当館企画の冊子「文芸特別展 島崎藤村と木下尚江」のなかの『ペンクラブと戦陣訓』が、「苦渋の選択をしたと考えられる」とじつにウマク解説している。

こうした藤村の姿勢は芥川龍之介のように老獪なる偽善という視点もありえよう。己の思想に殉じ獄死した人々への敬意も忘れてはならぬ。けれども戦後の文学者の戦争責任論議をふまえつつも、白井吉見が感じたような

自然な国民共同体意識からの側面も無視できない流れであろう。ともあれ、どんなにあがいてみても死んだやつにはかなわない、といったメイゲンにてらせば、未完のまま原爆投下前に逝った藤村への評価は『東方の門』とは別に『夜明け前』によって、ゆるぎないものとなったといえよう。(大きな拍手)

余滴

- (1) 今橋映子『異都憧憬―日本人のパリ』柏書房(同)平凡社
- 高村光太郎、金子光晴らを記す
- (2) 平野謙『於母影』集英社
- 高見順を中心に作家という職業について記す。
- (3) 澤木四方吉『美術の都』岩波書店
- 詩人の沢木隆子は姪。詩集『迂魚の池』諏訪湖でボートをこぐ夫の腕のなか生をかみしめる散文詩の佳作をおさめる。
- (4) 山崎正和『鷗外闘う家長』河出書房新社
- 「花袋研究学会々誌」第25号。腰原哲朗「文学とホリゾン」で白石實三の実話として紹介している
- (6) 勝本清一郎『赤色戦線を行く』新潮社
- モダニズム系の『前衛の文学』からさらにプロレタリア文学系へとすすみ、文学史上有名なハリコフ会議に出た清一郎は藤村の信頼もあつく、『こころの遠近』では藤村が本の処理として川や海に水葬のごとく捨てたと記している。
- (7) 山口知三『ドイツを追われた人びと―反ナチス亡命者の系譜』人文書院
- (8) 馬場弧蝶『明治文壇の人々』三田文学

- (9) 出版部「若かりし日の島崎藤村君」明治学院時代を中心に回想した長文
- 信濃毎日新聞(平成20―2―19)を県信濃美術館に寄贈された油彩十六点の特別展の記事ほか、鶏二、蔦助のことを紹介
- (10) 湯浅泰雄『和辻哲郎―近代日本哲学の運命』ミネルヴァ書房「マルクス主義とナシヨナリズム」
- (11) 勝野金政『藤村文学―人とその風土』木耳社
- 当文芸館の吉田一雄氏からご教示をえた。
- 吉田一雄氏は、木曾蘇南の勝野宅に金政を度々訪れた由。勝野金政は早大露文出身。『凍土地帯(吾妻書房)』にスパイ容疑のいきさつが書かれている由。
- そのスパイ容疑の朝日新聞(平成九年一月十三日)記事は「片山潜氏の秘書、故勝野金政氏、旧ソ連体制下でスパイ容疑……六十七年目の名誉回復遺族に証明書届く」ほかに勝野金政の長編小説『二十世紀の黎明(改造社)』ではスパイン内乱モロッコ独立運動などを描いている。
- (12) 雨声会。高橋正『西園寺公望と明治の文人たち』不二出版
- 藤村は自ら毎回出席している。

(腰原哲朗講師は、松本市出身。詩人、作家。島崎藤村研究家。県立高校長を経て、松本大学教授。長野県国語国文学会会長。主な著書は『腰原哲朗詩集』『島崎藤村 詩と美術』、共著『島崎藤村事典』、訳書『甲陽軍鑑』上・中・下など)

木下尚江 民主主義の先覚者 その思想と実践

山田貞光さん

山田でございます。本日は、木下尚江を社会改革者の面を中心にすえ、浅井冽・高田早苗・石川半山・幸徳秋水・田中正造らとの人間模様によれてお話しします。

はじめに

木下尚江は知る人ぞ知る松本市や旧松本中学校（松本深志高等学校の前身）が生んだ、民主主義運動の優れた先駆者です。しかし、戦前は「尚江を生んだのは松本市の恥」とか、「松本中学校の歴史に汚点を残した人物」とまで言って、公然と非難した市長や学校長がいました。

ではなぜ、尚江がそのような指弾を受けたのでしょうか。それは尚江が国体批判者であったばかりか、反軍国主義者で非戦論のオピニオンリーダーであったからです。そのため帝国主義・軍国主義時代にあつては、危険思想の持主とみなされ、官憲のブラックリストに載せられていた出来事が、長く災いしたからにほかなりません。

尚江思想と芽生え

尚江の誕生は、明治二年（一八六九）九月八日。出生地、現在の松本市北深志。木下家は墓地に隣接した屋敷であつたため、尚江は早くから死の恐怖を感じると同時に、「永遠の生命」という宗教的哲学的な問題に関心を抱く子供でした。

尚江の父、松本藩士木下秀勝は、廃藩置県の後、警察官となつて単身で任地へおもむいていたので、普段は祖母、母、妹の女性家族の中で育ちま

した。家庭環境は尚江の人間形成に大きい影響を与えたとみられ、後年の言動にフェミニスト的要素が色濃く反映します。

旧開智学校（開智小学校の前身）へ明治九年に入学。尚江は生家近くの宝栄寺で開かれていた民権家たちの演説会を祖母と度々聴きに行き、ある弁士の「今日の圧政政治を覆して自由の世界に出ずるためには、我々はみな一身を棄てなければならぬ」の主張に、身ぶるいするほど感じ入るほどの或る意味早熟な小学生でした。

開智学校六年生の時、尚江は福沢諭吉『学問のすすめ』を読んで、冒頭の「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」の文言にふれ、ことばに尽くせぬ感動であつた。」と、後年自著『神・人間・自由』（中央公論社）のなかで述懐します。

このように、先人の演説や書物に接して、思想的な影響を受けながら成長していった尚江は、次いで松中時代に移つて、さらに具体的に思想の深化を示します。

明治十四年（一八八二）秋、尚江松本中学校に入学。「クロムウエルの木下」と畏敬されたのですが、それはイギリスの清教徒革命の首謀者クロムウエルの史実を知つて酔いしびれ、講堂で演説などしたからです。松中五年の尚江は、新校舎落成の式典の中で在校生を代表して英語で演説をしました。明治十七年当時の成績表が現存しています。尚江は学年最年少ながら級中随一の高得点者。英語のほかに、漢文、歴史、物理の成績がとくにきわだっています。

開智、松中両校で尚江が師と仰いだ浅井冽に尚江は「文章を書くのは全く浅井先生の賜物」であると感謝。浅井は最初小学校教師の傍ら国会開設運動にも参加して、民権政社「奨励社（しようきようしゃ）」の創立委員や請願書の起草委員をつとめた人物。県歌「信濃の国」の作詞者として、また、松中、県師範学校（信大教育学部の前身）の教官としても有名です。

明治十九年（一八八六）二月、尚江は松中を卒業。英国憲法を講じる東京専門学校（早稲田大学の前身）に入学。早大出身者で明治文化の研究者として著名であつた木村毅は、先輩尚江を評価して著す。「木下尚江―彼こそは、早稲田が天下に誇りとすべき学生の一人である。しかも卒業生の彼としてよりも、入学生としての彼はもつとはるかに興味が深い。彼のような夢を抱いての入学生は、早稲田八十年の歴史のなかで、あとにもさきにも彼ひとりである」（『早稲田外史』）。

尚江が夢と希望をいだいた英国憲法の「国王たるもの悪を爲す能わず」の一文に失望したが、気を取り直し勉学に励む決心をしたのでした。

高田早苗（一）は、尚江の在学当時は英国憲法史やシェイクスピアを講じていました。高田は東京帝大で政治経済兼文学部卒。早くから坪内逍遙を西洋小説に開眼させたほどでしたから、文芸方面に常識が深く、尚江はこの高田早苗から多くの影響を受けたといわれます。

明治二十一年（一八八八）、尚江は東京専門学校法律科を優等で卒業。成績優秀賞の『マコーレー

論文集』を大隈重信夫人から贈られて帰郷。

社会改革を目指しペンで戦う尚江

明治二十一年（一八八八）松本にもどつて信陽日報の記者になります。「新鋭木下尚江入りて紙面を更新、一段の生気を放てる」と評され、とくに県庁移転問題で活動はめざましく二十歳の若さで頭角をあらわしました。しかし、移庁建議案は県会で否決された後、中南信側の主謀者たちは戦術を変えて分県運動に政策転換。尚江は移庁論者ではあったが、分県論には反対で、その内幕を新聞紙上で暴露したため迫害され、あぐくのはては信陽新聞も廃刊に追い込まれてしまう。同紙を中心とした活動を足場に国会議員を目指していた尚江は、その望みと職をいっぺんになくして失意の境地に陥つたのでした。絶望の中、尚江はキリスト教に出会い、明治二十六年、松本美似教会（3）で受礼。廃娼運動、禁酒運動、普通選挙運動などに専念。一方、生活の糧を見出すため、明治二十六年代言人（弁護士の前称）の試験に合格し、事務所を松本と上諏訪に設置。それがきっかけで信府日報の記者となり、論説を書くが、そのラジ



カルな筆鋒で発行停止に。「新聞こそは最も得意な仕事」と感じる尚江には、この仕事は弁護士以上に重要だったと推論できます。信府日報の主筆石川安次郎（号半山）の紹介で、後に尚江は幸徳秋水（3）たち同志を知ることになります。

明治三十年、尚江は選挙疑獄事件の容疑で警察につかまつたが、無罪となり、翌年出獄。これを機にこれからどうしたものか思い悩んでいた。そんな時、毎日新聞（現在の同題紙とは関係ない。当時の横浜毎日）で働いていた半山から「うちに来ないか」と誘われ、明治三十二年（一八九九）上京して入社。同年「世界平和に対する日本国民の責任」と題して毎日新聞に論説を執筆。以後平和と反国体を唱えます。日露戦争のころ、「人の国を亡ぼすものは、また人のために亡ぼされる。これは因果の必然なり」と尚江は主張して、平民新聞の同志とともに非戦運動を開始。明治三十三年石川半山宅で、尚江幸徳秋水と初会見。明治三十四年五月十八日尚江、秋水はやがて同志となる安部磯雄、片山潜、河上清、西川光二郎らと「社会民主党」を結成するが、二日後には結社禁止命令が出され、解散となりました。尚江の非戦論は、戦争に反対しただけでなく、戦争をする国家や、国家にとらわれる愛国心や、その中核にある君主観をも批判した点に特徴があります。

尚江は明治三十年代の活躍期に雄弁家としても鳴らし、「秋水の筆、尚江の舌」と称されるほど。尚江は上京以来、活躍の場が全国にわたり、或る時は弁舌さわやかに或る時は筆力で、一貫して社会格差の是正、国会の開設、男女貧富のへだてなく選挙権被選挙権を与える運動、非戦論、足尾鉾毒問題にと向かう姿勢は、同志と共に常に庶民の側に立つて、はげしいものでした。演説会の多くは、会場で「弁士注意」を受けるなど、官憲監

視のもとで行われました。

足尾鉾毒事件に係わる田中正造と木下尚江について。衆議院議員田中正造は、渡良瀬川沿いの農作物や魚類に被害を与える足尾銅山の公害問題を国会でとり上げて、国の政策は変わる見通しさえない状態のままでした。正造は国会を辞職し、明治三十四年天皇に直訴する重大事件が発生。歴史に残る直訴文は、秋水が書いて正造が加筆修正したものです。

明治三十三年、毎日新聞社（前述）で正造と面会した尚江は、すぐに足尾に特派員として現地取材して、二十日間にわたって毎日新聞紙上に「足尾鉾毒問題」の関係記事を多数連載しました。

正造が世を去る大正二年（七十一歳没）まで、尚江は看病し看取つたのです。正造の行う鉾毒問題に関する演説原稿の構想執筆から秘書的な仕事まで、始終正造を援護しています。尚江の著書『田中正造翁』『田中正造の生涯』からは、二人の師弟のような信頼関係が伺えます。正造に心酔した尚江は、長男に木下尚江にまつわる、知られざるエピソードのひとつです。

文集としての主要作品は、小説と評論ですが、このうち評論の大半は社会時評であります。非戦小説の場合は、明治三十年代の習作期（『一夜の仮寝』（4）以降のうち、日露戦争下に発表された『火の柱』（5）、『良人の自白』（6）は、我が国初期社会主義小説の代表作と評価されています。

社会主義運動を離れる尚江

明治三十九年（一九〇六）五月六日、母死亡。前年に平民新聞が廃刊したことあって、絶望の境地に立った尚江は毎日新聞社を退社。尚江三十八歳。同年十月執筆した「旧友諸君に告ぐ」で、毎日新聞社社長島田三郎、同志たちに、社会主義運

動から離れることを公表。イエスの福音にもとづいて「人生の革命」(7)を説いています。

尚江が「人生革命」の模範と考えたもう一人は前述した田中正造でした。尚江は三百円の大金を正造に寄付などして、人道の大戦闘士田中正造の姿をさらに大きく浮かび上がらせています。社会運動から身をひいても、同志仲間を支え続ける尚江でした。

まとめにかえて

木下尚江は、キリスト教的社会主義者、社会運動家、思想家、作家、ジャーナリスト、演説家と呼ばれるように、多面的に活躍をしました。未来を予見した大衆のために行動する「世の光」的存在であった木下尚江。尚江こそ松本が生み松本が時代を超えて誇りとすべき人物であり、民主主義の先覚者であったと思います。

今回お話した内容は、尚江の人生(一八六九—一九三七)を前半生に重点を置いて、社会改革の面から掘り上げてみました。ご静聴ありがとうございました。(大きな拍手)

註

(1) 高田早苗 大隈重信の改進黨結成や東京専門学校の創設に参画。後に文部大臣や早稲田大学総長をつとめた。

(2) 幸徳秋水 中江兆民に師事。自由・平等・博愛の精神に則って、明治官僚国家を痛烈に批判し、日露戦争には内村鑑三、堺利彦、木下尚江らと共に「非戦論」の立場を貫いた。「大逆事件」に連座して、秋水は処刑された。

(3) 松本美似教会(現日本基督教団松本教会)

(4) 『一夜の仮寝』 尚江の短編非戦小説。明治

三十年(一八九七)執筆の未発表作品。柳田泉早大教授によって発掘された。この作品の尚江自筆原稿は、早稲田大学文学部図書館に保管されている。

(5) 『火の柱』 尚江の中編小説。当時の非戦論の代表的作品。日露戦争のさなか明治三十七年(一九〇四)一月一日から三月二十日まで、毎日新聞に連載。題名の『火の柱』は、旧約聖書出エジプト記十三章十七—二十二の「主は彼らに

先立って進み、昼は雲の柱をもつて導き、夜は火の柱をもつて彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった」からとったと考えられる。昭和四十七年(一九七二)刊『火の柱』の英訳版『Pillar of Fire』が世に出ている。

(6) 『良人の自白』上編・中編・下編とある。非戦論の第二弾とも言うべき作品。いずれも『毎日新聞』に連載された。塩尻市出身の吉江喬松(弧雁)の父と生家がモデルとなっている。明治四十三年九月三日、『火の柱』『良人の自白』はいずれも発売禁止となった。

(山田貞光講師は、昭和五(一九三〇)年安曇野市生まれ。松本市立図書館司書・重文旧開智学校管理事務所長などを経て、短大講師・町議会議員・木下尚江研究会事務局長・日本社会文学会理事などを歴任。現在、明治文化研究所主宰。著書・編書には、『木下尚江と自由民権運動』『木下尚江全集』全二〇巻などがある。

山田貞光講師は、後援会の翌年、平成二〇(二〇〇八)年八月五日に逝去されました。享年七十七歳。

この記念講演を最後に体調をくずされたこと奥

様に伺いました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

木下尚江と島崎藤村

——二人をつなぐ座標——

ご紹介いただいた井出でございます。腰原、山田両先生が島崎藤村と木下尚江をそれぞれお話になった後で、私からは藤村・尚江の接点について、伊東一夫先生の発想に従いまして話すようにという文学的難題を与えられたわけです（笑い）。

はじめに

このところ十日ほどの間に、木下尚江の作品をいくつか読みました。昭和の初めの円本時代に改造社から『現代文学全集』という全六十三巻が出版されました。

私は野沢中学（野沢北高等学校の前身）生でしたが、戦時中に軍国教育をほどこされました。敗戦と同時に、教科書を墨で真黒に塗るような体験をしまして、その結果私は戦後初の不登校の実践者でありました（笑い）。

当時、結核が流行ってまして、中学四年生とき結核になって、できてまもない佐久病院に半年位入院していた期間に、カーキ色の日本文学全集を一卷から全巻読もうと決心して、実際に読みました。その一冊は今日持ってきた三十九巻目の社会文学という巻です。この中には、明治の社会主義者たち、そして文学的な仕事をした人たちが収められています。よく知られた人では中江兆民、幸徳秋水、堺利彦、大杉栄そして木下尚江の代表作などが収録されています。

木下尚江の社会小説

尚江の『火の柱』という作品は、彼の非戦小説の中では処女作と言われ、聖書のことば・火の柱から書名の付いた小説です。この作品を読んだ記憶はあります。実は私は読んだストーリーは翌日忘れてしまうという特殊な才能の持ち主ですが（笑い）、この作品で覚えている事実が一つだけあります。作者木下尚江は、普通選挙法を提唱して松本から上京。その後、毎日新聞に勤めるわけです。

毎日新聞の社長島田三郎のもとで、尚江は自由奔放に記事を書く機会に恵まれます。島田の配下にはそうそうたるジャーナリストが大勢いて、社屋内で碁盤を挟みたばこを吸いながらいろんな話をしたでしょう。そのなかに井上宅治という記者がいたはずで、秩父事件の会計長井上伝蔵の甥にあたる人物です。木下は多分雑談で井上宅治からそのことを聞いていたのでしょう。『火の柱』の主人公篠田長二、この篠田姓は秩父には沢山ある姓です。したがって、作品の内容からみて長二は尚江の分身とも言うべき人物かも知れませんけれど、多分に井上宅治の面影が投影されているはずで、主人公の篠田が、秩父へ帰る道すじを熊谷から目的地の村（たぶん下吉田村）まで実際にリアルに書いています。おそらく尚江は一度取材に行っているのではないか、と思います。それほどきちんとして書いています。

その時、井上宅治の叔父が実は秩父事件の会計長で、尚江が『火の柱』を書いた頃は、宅治の叔

井出孫六さん

父井上伝蔵は行方不明のまま欠席裁判で死刑の判決が出ています。そして大正七年六月二十三日に北海道の野付牛、今の北見で亡くなっています。伊藤房次郎という変名のまま死を迎えます。亡くなる時伝蔵は「実は自分は秩父事件の元凶の一人で、欠席裁判で死刑を宣告された。仲間も皆散った。どうか自分の骨を秩父に埋めてほしい」と遺言を家族に残すのです。急報に接して井上宅治は野付牛に駆けつけます。

ここでちょっと道草を喰うことをお許し下さい。日露戦争に反対した木下は幸徳秋水、堺利彦などとも親しく、堺が毎日新聞に訪ねてきて、井上宅治から秩父事件の話を聞いたことは想像に難くない。堺はその頃社会主義運動に忙しく、秩父事件を振り返るような暇はなかった。大逆事件から大正期長い冬の時代、大正末年の共産党結成などに関わったそのずうっと後、昭和の初め、政治運動から一歩退いた堺が、『中央公論』に連載した『あてなし行脚』という旅行記を連載しました。その中の秩父訪問記は、秩父事件再評価の一里塚ともいえるべき作品です。当時堺は検閲をはばかって、秩父を案内した人物の名をぼかしていますが、その背後に井上宅治の気配が感じられるとともに、堺は『火の柱』をしつかりと読み込んで秩父行脚に出かけたとも考えられます。

さて、閑話は休憩としまして、木下尚江と島崎藤村の関係が、さっぱり出てこないとお思いでしょうね（笑い）。

二人の生い立ち

尚江の生まれは、明治二年（一八六九）です。藤村の誕生は、明治五年（一八七二）。三つ違いです。先程、山田先生のお話にありましたように、開設間もないあの開智学校に明治九年尚江少年は入学しています。

藤村が生まれた木曾の馬籠というところは、松本の開智学校にあったような文明開化を象徴する明るさは程遠い場所だったのではないのでしょうか。当時の馬籠は『夜明け前』に再現されています。

二人のパーソナリティは、そういう環境から生まれてきているのかな、と思います。その意味では、尚江のパーソナリティは、印象としては非常に明るく、開智学校の校舎そのもののような印象です。尚江は明治と言う時代を象徴するような文明開化の時代を代表する人物だと思っています。

それに対して、藤村は中仙道の馬籠という非常に伝統のある宿場の本陣・庄屋を兼ねた島崎家に出生。生まれて間もなく、馬籠宿が衰退していく非常に暗いイメージ。しかも島崎家に流れている



血との関係で、明るくない空気のなかで育ち、物心つくともまもなく一家離散のような形で、明治十四年彼は小学校時代に兄に連れられて故郷を出て行く。東京へ遊学するというのではなくて、もう馬籠にはいられない状況で離散するわけですね。過酷な故郷喪失者として東京に行った。

このような二人の生い立ちを比べると、何か明治という時代の明と暗を対照的な形で育ったのではないかと感じます。しかし、明治二十年代二人はキリスト教に傾斜し、共に受洗。ところがキリスト教に入ってからゆく姿勢も二人は、対照的です。当時、藤村が交わっていた若い詩人たち、たとえば後年民俗学に途を開いた柳田国男の回想などによれば、藤村は「私のようなものでも、どうかして生きていきたい」というようなことを口癖にする。『漢方薬』のような若者だったというのです。藤村の信仰はどちらかといえば内向きであり、尚江のキリスト教は社会のためといった逆の姿勢が感じられます。

社会の改革をめざして

二人の交差、その一。明治二十五年（一八九二）、石井亮一・筆子夫妻がやってきた、全国初のキリスト教福祉施設「滝乃川孤女学園」（滝乃川学園の前身）へ、明治女学校の英語の先生であった春樹（藤村）は生徒と一緒に手伝いに出かけ、その都度カンパまでしています。藤村は今でいうボランティア活動のはしりをしていた事実が、滝乃川学園に現存する「有志寄附簿」から読み取れます。

尚江は、明治三十二年三月、「滝乃川学園訪問記」（註一）を毎日新聞に二日続けて書いています。同じ滝乃川学園への対し方も尚江の場合はその事実を社会に広く伝えたいというジャーナリストの使命感に支えられているわけでしょう。が、藤村と

はすれ違ったまま会うことはなかった。

二人の交差、その二。『破戒』の出版（明治三十九年）を、二年前に知っていた尚江。

尚江は、明治三十七年小諸で開かれた演説会の後、藤村を訪れたが藤村は夫人とともに函館に赴いて居らず会えなかったのは残念だった旨を平民新聞、同年七月三十一日付に記し、付言して「藤村君の腹中既に一個小説の長編結構成れりと聞く、篇中新平民の境遇に同情を寄するものとあり、（中略）其の梓成りて市に上るの日は、必ず我が文界に一新異彩を放つならん」として、『破戒』の予告をしています。

また、『破戒』が出版された後では、尚江は雑誌「新紀元第七号」の紙上で、その上梓を喜び、好意的な『破戒』の評を載せています。

尚江の願い、藤村の心

尚江という人物は、明治三十年頃まで松本で生活し、弁護士として新聞記者として様々な社会問題にかかわっています。社会ということばが定着したのは、日清戦争が終わって日露戦争に向かうはざまの時代です。十九世紀末から二十世紀の初めにかけて明治があり、ちょうどその頃「社会」ということばが出てきて、それに「問題」ということばが付いて、この期間に日本にとって曲り角になるような現象が出現します。「社会問題」ということばから、やがて社会主義ということばが生まれてきます。尚江は松本でいろんな形で社会問題に取り組んだ人です。例えば、明治二十年代に中村太八郎と普通選挙を提起しています。しかも、松本という地域で取り組んだ問題は、彼が東京に行くことで、国家的問題に展がっていくことになります。

それから中村屋を創業した相馬愛蔵（註二）と

組んで、尚江は松本で禁酒運動を始めます。これもおそらくキリスト教との関係で始まるわけでしょう。

さらに、娼娼運動、つまり娼婦をなくすことも松本でやっています。尚江は、いわゆる民主主義の理念を松本からはじめた人ではなかったかと思っています。

明治三十七、八年当時、尚江が毎日新聞に『火の柱』『良人の自白』を連載小説として書いた背景には、一回の原稿料が十五円、三ヶ月書いて約千五百円。大変な収入です。『良人の自白』は、さらに長いから三千円位。これがベストセラーになって、収入は大変な額です。単行本は、当時、幸徳秋水だとか堺利彦だとか尚江とか、いう人たちがやっていた平民新聞の財政基盤となるのです。平民新聞がなぜ創設されたかという点、日露戦争の時期、戦争反対のための組織をつくることにあったからです。その反戦組織の資金づくりを尚江は、小説を書くことで支えたのです。『火の柱』『良人の自白』もまさに金のために書いたと言えます。そのために腹をくくって書いたのです。

この『火の柱』と『良人の自白』は、藤村の『破戒』とほぼ同じ時期に出ています。『破戒』のモチーフは尚江の二作品の持つ社会性とは隔たったところにあったといえるでしょう。

二人の姿勢はおのずとちがいます。藤村は非常に新しいヨーロッパの文明主潮みたいなものを勉強しています。あくまでも自我が基本で小説を書いていきます。従って、当時流行ったトルストイのものには、藤村はあまり傾斜しません。トルストイとは対照的なロシアでいえば、ドストエフスキの『罪と罰』などを英文で読んでいます。ドストエフスキは、一度死刑の宣告を受け、その内面的衝撃と精神的挫折の晩年多くの作品

を残すことになる。

明治三十九年、社会主義運動に挫折して、仲間や幸徳秋水が係わった、あの大事事件を見ていた尚江が、トルストイではなく、ドストエフスキの方向に傾斜していたならば、尚江にあるいは違った時代があつたかも知れません。藤村にとつて、ドストエフスキの『死刑宣告』にあたるものがあつたとすれば、『新生』事件だったかもしれないが、ここで触れる余裕がありません。

一挙にその晩年にとぶことにします。藤村が『夜明け前』を書き上げた、昭和十年の秋、藤村の末娘柳子さんを南佐久郡白田町の井出五郎氏に嫁がせますが、その折、藤村は白田町にやってくる。藤村が泊まったのは、わたしの生家の向かいにあった豊倉という旅館で、我が家にも立ち寄られたのを、私はかすかに記憶しています。

『夜明け前』を書き終えた藤村にとつて末娘の柳子さんを嫁がせるのは、家族に対する最後のつとめだったものと思います。藤村はこの年六十三歳、まだ大きな仕事が残されています。

昭和十一年（一九三六）九月五日から十五日まで、アルゼンチンのブエノスアイレスで開かれた第十四回国際ペンクラブ大会に出席のため、藤村は夫人同伴、有島生馬とともに日本を離れます。

「私のような者でも生きていけるんだな」と言い続けてきた藤村でしたが、この国際ペンクラブ大会で、日本は国際連盟を脱退し、つづいて二・二六事件のクーデターで、軍事国家になったという予想もつかなかった国際的な批判をあびます。彼藤村は日本ペンクラブの会長として、何とか良心をたぐってきたと言い、苦しい長旅を終わってきたのでした。

腰原先生のお話に合わせて言えば、『東方の門』に取り組んで、冒頭の三章を書いたところで完

成をみることなく昭和十八年に藤村は亡くなります。未完の作『東方の門』には作者の「創作ノート」が残されています。そこにY君の履歴が詳しく書かれている。Y君とは藤村が親しく交わった仏文学者吉江喬松（孤雁）であることは明らかですが、『東方の門』に登場しないままに終わります。さて、木下尚江の傑作『良人の告白』の主人公が吉江孤雁の父であることは、山田先生の研究で明らかです。してみると、ここでもまた、尚江と藤村は作品の中で吉江父子を主人公にしながら限りなく接近し、また相交わることなく終わってしまったと見るべきでしょう。尚江と藤村はどこまでも接近しながら相交わることのない生涯を送ったと見なければならぬというべきでしょうか。

まとめとして

木下尚江と島崎藤村。二人に共通する事象から述べて参りました。尚江も藤村と同じ頃受洗しています。教会は松本と東京でした。藤村が手伝った「滝乃川学園」の訪問記を尚江が毎日新聞に書いたのは、藤村が小諸義塾に赴任した頃なので、二人が直接会ったとは思えません。尚江は小諸に藤村を訪ねたが、留守中のため会えずじまいでした。

その頃から尚江は普選運動、禁酒娼娼運動、足尾銅山の公害問題などにふかく傾斜しながら、『火の柱』『良人の自白』をはじめとする社会小説を書いて注目を浴びるのですが、小諸で『破戒』に打ち込む藤村と重なります。

ではこの同時代の二人の作家が直かに会ったことがあるのかないのが問題となります。二人が会ったことを示す記録は見つかっていません。尚江と藤村の接点は、まだまだ読みきれずに残っていることを申し上げて、私の話を終わらせていた

だきます。(大きな拍手)

註一 毎日新聞(尚江記事)「滝野川孤女学園を訪ふ」
木下 生

〔前略〕年はまだ三十をいくつも越えないとおもわれる園主石井亮一氏の孤児院の設置目的を記す。(中略)開設の頃、濃尾地方に大地震が発生、初めて学園に来た孤女は十五人、その翌月には二十一人となり、以来入園孤児は増え続け、現在(明治三十二年三月十四日)在園するもの五十八人、この内四名は白痴者なり(後略)。

近代化で最も遅れていた至難の社会事業分野であったが、尚江は亮一の事業に対する関心を喚起、啓蒙した。なお、藤村は濃尾地震の直後、祖母の葬儀に兄に代わって名古屋経由で馬籠に帰郷、大震災の惨状に接しています。この実体験が彼のボランティア活動の原点にあるともいえましよう。

註二 相馬愛蔵(一八七〇〜一九五四)

新宿中村屋創業者。松本中学卒、尚江の五年後輩。東京専門学校卒。

夫人良(黒光・一八七六〜一九五五)は、明治女学校在学中から文学作品を発表した才媛。萩原碌山を保護し、木下尚江らと交遊して中村屋は新進芸術家たちの文学サロンの観があった。また愛蔵とともにキリスト教人道主義者で、偏見のない包容力にとみ、インド独立運動の亡命志士をかくまい、ビバリー・ボースを娘澄子の夫とした。著書に、『黙移』『明治初期の三女性』『穂高原』など。明治女学校で島崎藤村に英語を教わった。

(井出孫六講師は、佐久市白田町出身。生家は造酒屋。小説家。中央公論社勤務を経て、秩父事件に取り組み、秩父山村の廃屋に起居して山深い村や

峠を歩き回る中で、独自の実証的創作方法による情熱的な『秩父困民党群像』で文壇に登場。『アトラス伝説』で直木賞。現在、日本文芸家協会日本ペンクラブ会員。馬籠藤村記念館顧問。丸岡秀子を長姉、井出一太郎を長兄にもつ)

〔司会〕

本日の講演会に、木下尚江のお孫さんにあたる木下雅雄様と奥様がお見えですので、質問に入る前に皆様にご紹介します。

ご夫妻(起立され) 目礼、大きな拍手。

〔質問者〕

士族出身の木下尚江が、庶民の目線で社会運動に向かった動機はなんでしたか。

〔回答〕 山田貞光さん

尚江を社会運動に向かわせた動機は、二つ挙げることができると考えます。

一つは、神の前では「人はみな平等自由である」というキリスト教のおしえであります。尚江が上京する前の松本時代に、県庁移転の問題で新聞記者として内幕を暴露したため、新聞は廃刊となつて、失意の尚江は妹伊和子の助力もあつてキリスト教に出会います。

キリスト教信仰は、彼の運動に大きな位置を占めていたと思います。

二つ目に、開智学校の恩師、浅井洌の存在です。浅井は教職の傍ら自由民権思想と国会開設を唱えました。尚江自身師の学恩に感謝しています。

こうして、社会格差の是正を願う尚江思想の芽生えは、すでに小学生時代から。社会運動を開始したのは、記者・弁護士をした松本時代から、その運動の原動力は信仰と恩師の教知れぬ影響が中核となっていたと思います。

〔質問者〕

ありがとうございます。